

食道癌肺転移に対する化学療法＋ラジオ波凝固療法の治療成績

熊本大学医学部附属病院

消化器外科 原田和人、上村紀雄、志垣博信、馬場祥史、岩槻政晃
藏重淳二、坂本快郎、吉田直矢、馬場秀夫

画像診断科 河中功一、山下康行

【背景】

遠隔転移を有する食道癌に対しては、化学療法が標準治療となっているが、一時的な奏功が得られても CR が得られることは稀である。当科では肺転移を有する進行食道癌症例において、化学療法と肺病変に対するラジオ波凝固療法（RFA）を併用し、長期間寛解が得られている症例を経験している。

【目的】

有効症例を提示し、肺転移に対する CT ガイド下経皮的ラジオ波凝固療法の成績を示す。

【結果】

2007年6月から2014年12月までに食道癌肺転移17症例に対し計32回のRFAを施行。RFAに伴う有害事象は気胸を2例、高度の胸痛を1例に認めたが、致命的な合併症は認めなかった。1年および2年生存率はそれぞれ78.8%および62.2%であった。また、初回RFA後5年以上の長期生存例も認めた。

【まとめ】

食道癌の転移性肺腫瘍に対してのRFAは局所コントロールが良好であり、重篤な合併症なく施行することができる。化学療法奏効例でRFAを付加することで長期生存が得られたケースもあり、集学的治療の一環として有用と考えられた。